

Monatsmagazin Japanisch

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年 創刊29年目 **Nr. 340**

月刊ウィーン

GEKKAN-WIEN 2017年12月号

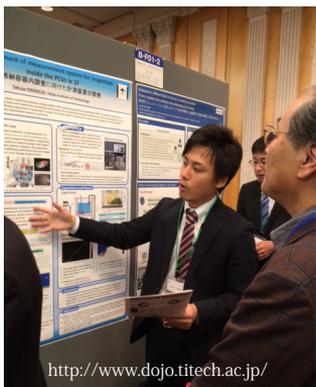




杉本純の原子力の話 II ウィーンと京都 73

筆者が勤務する東京工業大学グローバル原子力安全・セキュリティ・エージェンツト教育院は文部科学省の支援により、「人類の生存基盤を脅かす核拡散、核テロ、大規模な原子力災害や緊急被ばく問題等のグローバルな原子力危機」の分野において、国際的リーダーとして活躍する人材を育成することを目的として、平成二三年度より修士・博士課程一貫の学位取得プログラムを実施している。このプログラムは、深い専門性のもとより、幅広い社会性や国際性、さらに豊かな人間性を養い、時代の流れを俯瞰しながら、「高い志を持つて、人々のため、社会のため、世界のために貢献するリーダーを育成する」ことを教育目標としている。学生は全寮制の「世界原子力安全・セキュリティ道場」に入門し、一部の教員も学生とともに住み、学生が互いに切磋琢磨する教育環境を整えている。

十月一九、二日に名古屋で開催されたフォーラムには、文部科学省に採択された文理全分野にまたがる全国三三六大学六二のプログラムの学生と教職員を中心に約千名が参加した。当教育院からは博士三年の学生と筆者が参加した。出口戦略に関する事前議論では、提言について学生同士で議論し、最終日に名古屋宣言

<http://www.dojo.titech.ac.jp/>

としてまとめた。学生によるショートプレゼンテーションでは、数百名の聴衆に對し所属するプログラムの概要を発表した。ポスター発表では、研究内容を説明し、産官学の参加者から貴重なコメントやアドバイスをもらった。その他、基調講演、パネル討論などを聴講して、最新かつ貴重な情報を得た。全セッションに参加したこと、自己の多様性を深めるとともに、様々な分野で活躍する社会人や学生との人脈を広げることができた（本文、写真とも写真中に記載のurlより）。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市のクリスマスイルミネーションについて述べてみたい。ウィーンのクリスマスイルミネーションといえば、グラールベン通りのシャンデリアのようなカテナリー照明が有名である。石造りの美しい建築物と調和し、華やかさでクリスマスの雰囲気を感じさせている。グラールベン通りにつながるコールマルクト通りのイルミネーションは、シンプルだが繊細である。通り両脇の高級店のデコレーションを眺めながら歩くのは楽しい。この他、市庁舎前広場、シユテファン大聖堂前広場、マリア・テレジア広場、シェーンブルン宮殿などでクリスマスマーケットがたち、建物や木々がライトアップされ、クリスマスデコレーションが並ぶ。寒い中、暖かいプリンシユやゲリュワインを飲めるのが嬉しい。

一方、京都では、ROOM本社の敷地に面した佐井通り沿いの並木道を中心に、八六本の木々に約八六万個の電球を点灯するルームイルミネーションが開催される。市内では最大級規模である。五条通りと佐井通りのコーナーにある高さ約10mのヤマモモの木をシンボルツリーとするほか、光と音のアトラクションも実施さ



れる。また、京都駅では、高さ三mの巨大ツリーなど、約二万球もの電飾が京都駅ビル全体を美しく彩る。カッパルや観光客が大階段に座りイルミネーションを眺めながら写真撮影したりと、クリスマスモード全開となる。この他、市中心的京都ホテルオークラでは、街路樹がイルミネーションで彩られ、美しく輝くLEDの光で辺りには幻想的な雰囲気漂う。両市のクリスマスイルミネーションは、光のページェントとして観光客と市民に親しまれている。

余談であるが、筆者はグラールベン通りや市庁舎前広場などのイルミネーションは何度も楽しんだ。ROOM本社や京都駅ホテルオークラのイルミネーションもよく観る機会があった。両市のクリスマスイルミネーションを紹介できた幸運に感謝しつつ、編集部撮影をお願いしたグラールベン通りの写真を掲載させていただく。

■杉本純 前京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長 ■